

茅風



Breeze from the field of thatch-grass

2024年12月18日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 73号



ススキの種採取(9月28~29日) 撮影:清水英毅

2024.6月中旬~2024.11月の活動報告

【6月】

- 15日、16日 「森林整備でリトリート」に20名参加。「増井試験地」の除伐作業と希少種の手入れを実施。

【7月】

- 12日 「茅風通信」72号発行
- 13日、14日 「防火帯整備」に11名参加。翌年の野焼きに備え防火帯を整備。
- 14日、15日 防火帯整備に続いて、楽習会「荻ノ島茅葺集落・ブナ美人林視察」実施。11名参加。

【8月】

- 17日、18日 6月に続いて上ノ原の植物調査実施。小幡和男さん、飯田さん、栗原さんが参加。
- 上記の植物調査に合わせて、青水プログラム「植生調査・森林散策」を実施。参加者11名。ミズナラ林のナラ枯れの状況なども検証した。

【9月】

- 8日 諏訪神社大祭・獅子舞奉納に青水より、清水、川端、藤岡(和)、草野が参列。
- 21日、22日 「土呂部の草原で茅ポッチづくり」に15名参加。六年ぶりに土呂部を訪問し、日光茅ポッチの会と交流。
- 28日 「自然共生サイト」令和六年度後期の登

目次

- 6月中旬~11月の活動報告(事務局).....1
 - 2024 定例活動②「森林整備でリトリート」.....2
 - ◆開催報告(草野 洋)
 - 2024 定例活動③「防火帯整備」.....3
 - ◆開催報告(有田 和實)
 - 学習会「荻ノ島茅葺集落視察とブナ美人林」.....4
 - ◆開催報告(有田 和實)
 - 2024 定例活動④「植生調査・森林散策」.....5
 - ◆開催報告(草野 洋)
 - 流域連携PG「土呂部の草原で茅ポッチづくり」.....6
 - ◆開催報告(草野 洋)
 - 2024定例活動⑤.....7
 - 「ミズナラ林整備とススキの種採集」
 - ◆開催報告(稲 貴夫)
 - 諏訪神社大祭・獅子舞奉納.....9
 - ◇参加報告(草野 洋)
 - 小谷村「草原シンポジウム・サミット」.....10
 - ◇参加報告(河辺 穂奈美)
 - 藤原だより(北山 郁人).....13
 - こもんずの広場(河辺 穂奈美・川端 英雄).....13
- 編集後記

録申請実施(後日、環境省担当課より、申請数多数のため、次年度以降の対応になる旨連絡あり)

- 28日、29日 「ミズナラ林整備とススキの種採取」に11名参加。活動に併せて「里山の土壌を知るプロジェクト2024」の土壌サンプルを採取。

【10月】

- 4日、5日 長野県小谷村で開催された「第14回全国草原サミット・シンポジウム」に、青水より北山塾長以下、藤岡、西村、稲、河辺が参加。
- 23日、24日 麗澤中学一年生の奥利根水源の森林フィールドワークが、青水関係者18名がインストラクターとなり、上ノ原で実施。5クラス計163名の生徒たちに、自然観察や目隠しトレイル、茅刈りなどを指導。(次号で詳細を報告)
- 26日、27日 上ノ原の茅刈りに39名が参加。成果は166ポッチ。(次号で詳細を報告)
- 上記の茅刈り終了後から翌月4日にかけて、有志で茅刈合宿実施。合計106ポッチの実績。

【11月】

- 23日、24日 茅出しに17名参加。合計834ポッチ搬出。うち、600ポッチは昨年に引き続き平沢官衙の屋根葺き替えに使用。(次号で詳細を報告)

※幹事会は6月9日、7月21日、8月11日、9月15日、10月20日、11月17日開催(何れもオンライン)

■2024定例活動②

「森林整備でリトリート」

報告 草野 洋

6月の活動は「森林整備でリトリート」です。15、16日の二日間、上ノ原で汗を流して心身ともにリフレッシュするプログラムに20名が参加しました。

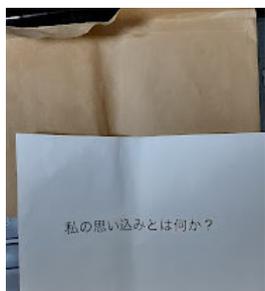
今回の森林整備のメニューは、天然更新箇所での除伐です。10年前に一斉皆伐した後、天然更新して藪状になった落葉広葉樹林で、有用樹の育成を促すために不要な木を切除する作業です。



この時季の上ノ原の風景

【リトリート】

まずは井上さんと柳沼さんのコーチングでスタート(写真・右)。「上ノ原入会の森という素晴らしい自然の中で日頃の心身の疲れをとりましょう。」そして、この2日間の行動の中で意識してほしいといながら渡された封筒には「お題」が入っていました。私への課題は「私の思い込みとは何か？」(写真・下)。どうやら全員の「お題」はそれぞれ違うようです。さすが最近、人間を研究しているという井上さん、何か心の中が見透かされたような的確な「お題」、皆さん困ったような顔をしながらも大切なことだと意識したようでした。



【森林整備】

リトリートによる導入が終わると、一同は森林整備の作業現場に向かいました。作業を行った場所は、増井元幹事がドクター論文の課題のために10年前に皆伐した試験エリアです。その試験とは、草原に隣接する、かつては草原であった二次林を伐採すると、一旦草原に戻るのか否か、実際の遷移の状況を検証することでした。その後、草原には戻らずに年毎に様々な樹種が生い茂ってきたことから、今度は百年後の立派なミズナラ林を目指して、除伐作業を昨年より実施しています。

北山塾長は作業の前に除伐作業の目的を解説した上で、ウルシなどへの対処法、ミズナラやクロモジ等の残すべき樹種について解説した上で、残してほしい樹木に赤リボンを結び付けて、目印としていきました。参加者は続いて、斜面を注意深く移動しな

がら、横に張り出した枝にブドウ蔓が絡まり合った形の悪い木など、それぞれが除伐の対象だと見定めた樹木をのこぎりで除伐していきました。

今回は子供に自然体験させる場所を探していたお父さんに付き添われた小学2年生の男の子が参加しました。ハードルが高いかと思われた今回の作業ですが大いに興味を示し、嬉々としながらのこぎりで樹木を伐採していました。

【希少種の手入れ】

この日は別動隊が希少種の手入れを行いました。希少種を特定して目印をつけ、周りのススキを切除して光が当たりやすいようにしていきます。一度に急激な変化を与えないようにするため5割程度を切除して1ヶ月後の7月の活動時にさらに調整することにしました。

【「ゆるぶの森」散策】

2日目は除伐作業の前に、「ゆるぶの森」を散策する時間を設けました。今回は上ノ原が初体験の参加者も多く、ところどころ立ち止まりながら、食い入るように北山塾長の説明に耳を傾けていました。

【森林整備余話】

その後、1日目に引き続き、除伐作業を実施しました。作業が終わって全体を見渡すと、ミズナラなど残すべき樹木の周囲が刈払われて、以前より明るくなりました。除伐を継続することによる年ごとの遷り変わり、そして五十年後、百年後のミズナラ林の姿を想像するだけでも、流した汗が快く感じられました。

今回は千葉県鴨川で森林整備作業を行っている東京科学大学(旧東京工業大学)の学生5人が参加していました。普通の森林整備と違い、伐る木を自らの決断で選ぶという緊張が伴う初めての作業に最初は戸惑ったようでしたが、このような作業はなかなか経験できないことがわかったようでやりがいを感じたのか楽しそうな様子でした。



希少種はどこだ



■2024定例活動③

「防火帯整備」

報告&感想 有田 和實

7月の定例活動「防火帯整備」には11名が参加。二日目上毛高原駅で一旦解散してから、引き続き有志で現地学習会を行いました。訪問地は新潟県柏崎市高柳町の荻ノ島茅葺き集落と十日町市のブナ美人林他。3日間の活動を初参加で樹木医の有田さんが紀行文風にまとめていただきました。(草野)

今回、この中に「ブナ」の若木が見つかりました。直径5cmぐらいで高さは3m~4m程度の将来性を感じる立派なブナです。このブナを見たときどこから来たのか疑問がわいてきました。

仮説① ネズミなどの小動物が運んで来たという説(どこかにまだ見えていないブナがあれば別ですがこの森の種をつけるブナのところまでかなり遠い)。

仮説② 落葉広葉樹林の中で細々と生きていたブナの苗が伐採を契機に旺盛に生育したという説。

仮説③ 伐採する前の埋没種の発芽・育成説。

さてどれだろう。この森はダイナミックに動いている。まだまだ「ゆるぶの森」の全容が見えていないのかも……。このほか今回は、ハリギリ(センノキ)、イヌエンジュ、アオダモなど有用な樹種を改めて確認しました。

この作業ではどの木を残すか迷います。50年先100年先の姿を想像しながらすると、やりやすいとか自分の決断が納得しやすい。このことは、私にとって「植林するとき50年後のこの山の姿を思い浮かべて植えなさい、そうすれば楽しいし、どこにどんな植え方をすればいいかが自ずとわかる」と先輩に教えられた山仕事の極意で、山仕事をする際の「思い込み(こだわり)」なのです。

「思い込み(こだわり)」はポジティブな「思い込み(こだわり)」とネガティブな「思い込み(こだわり)」があり、ネガティブな思い込みは行動を自縛して、他とのトラブルになりやすく迷惑を及ぼすが、ポジティブな思い込みは生き方の指標となり自分を鼓舞する。思い込みは決して悪いことばかりではないな、自分がそれをどう使うかであろうと、リトリートのまとめの時に「お題」の回答が見つけれられました。



写真・左 リトリート
終わりのコーチング
写真・下 この時季の
花 タニウツギ



7月13日の茅場防火帯整備に初めて参加しました。数年前から、清水英毅様や川端英雄様からお誘いを受けていましたが、体調不良でなかなか出歩くことが出来ませんでした。今回、心臓手術から2ケ年が経過し主治医から外出の許可が得られ、皆様方の事業に参加することが出来ました。

上毛高原駅からレンタカーで上ノ原に向かうにつれ、緑のトンネルを抜け、溪流を眼下に見ながら素晴らしい自然の中に引き込まれていきました。

茅場に着き、初めて見る茅場の雄大さや樹林に圧倒され、初めての私には何をお手伝いしてよいやら？清水様と相談し、茅場全体の視察点検と皆様の活動状況を記録することにしました。



作業準備一刈払機の調整

作業服に着替え作業準備に取り掛かり、晴天の中で早速刈り払い作業が始まりました。

昔の若者？が草刈り場所に散り、慣れた手つきで防火帯を刈り払いはじめました。1mほどに伸びた茅と雑草を汗を流しながら一生懸命に作業している姿はとても美しく感じました。草に交じってタニウツギが多く繁茂していました。人が歩いている部分には外来種のヒメジオンが多く咲き乱れているので、清水・有田ですべて抜き取り処分を行いました。汗をかき喉の乾いた時の救いは、水源から流れ出る泉で喉を潤した時でした。

刈払いの
勇姿



作業後は、「ロッジ・たかね」で温泉に入り、美味しい夕食を頂き、食後は車座講座（交流会）でお互いの考え等を出し合い楽しい一日を終えました。

二日目は、前日の作業の続きと、清水・有田で茅場内外の点検や動植物の観察を行いました。茅場の中には、貴重種の生育地があり、会員の保護成果で白く可愛い花が咲き、シジミ等の蝶が群舞。すると突然、保護ネット外にカモシカが現れ、ジーと私たちをのぞき込む様子はとても可愛く数分間のお見合いをしました(写真・右)。



下は上ノ原で観察した動植物 左から右下へ

希少種に訪花したルリシジミ ホタルブクロ ムラサキシキブ タニウツギとウラギンシジミ クマイチゴウウルシ果実 ヒメシジミ オカトラノオ トリアシシヨウマ ミヤマオダマキ ヤマブドウ ミズナラ虫嬰



午前中で予定していた防火帯刈りを終え、「たかね」で美味しいカレーライスを頂きました。食後は、裏山の旧炭焼き小屋周りのブナ林を散策(写真・右)。是非、この見事なブナ純林を村の観光・教育の目玉として一般の来訪者に案内し、紹介しては・・・との意見が飛び交いました。



**■学習会「荻ノ島茅葺集落視察とブナ美人林」
報告&感想 有田 和實**

二日目の午後からは小雨模様になり、新潟県に移動し「荻ノ島茅葺集落」の視察と「ブナ美人林」の視察を行いました。

「荻ノ島茅葺集落」(写真・右)は、縄文時代から続く環状集落で、耕作地(田んぼ)を中心に数件の茅葺の家屋が囲んでいます。「荻ノ島松尾神社」を中心に数百年続いた集落も、数件の茅葺住宅が残るのみで、一部は屋根が崩落している状態でした。



荻ノ島茅葺集落から僅かな移動で高柳町に移動し「高柳町じよんのび村(ファームハウス)」の Cottage に宿をとりました。宿舎から小雨降る中を徒歩でつり橋を渡って本館に移動して、温泉に浸かり豪華な夕食を頂きました。昔の集落を観光用の体験型施設にリニューアルしたもので、現代の若者向けに数件の Cottage も建てられ、Cottage の周りの樹林にはブナ林が多く残っていました。夕食後は、Cottage で地酒を傾けながらの懇親会を開き、大いに胸襟を開きこれからの「森林塾・青水」について語り合いました。



ファームハウスでの懇親会

翌朝は、朝風呂に入り浴場脇の食堂で、地元食材をふんだんに調理した美味しい朝食を頂きました。最終日(三日目)は、十日町市にある「ブナ美人林」(写真・右)の視察に出かけました。小雨降る「ブナ美人林」は、素晴らしいブナの純林でよく整備され、散策にはとてもやさしい観察林でした。小雨が降りしきる樹林は「樹幹流」を見ることが出来ました。



清々しいブナ美人林を後に帰路に向かい途中の昼食は、そば処「まるにし」で新潟県特産の「へぎそば」をおなか一杯頂きました。六日市IC近くの道の駅「クロステン」でお土産を買い、15:30には無事上毛高原駅で解散となりました。

今回の参加は初めてでしたが、自然豊かな上毛高原の自然に触れることが出来、また、経験豊かな皆さんと触れ合うことが出来、満足・満足でした。次の機会にも是非参加をしたいと心待ちしております。

■2024定例活動④ 「植生調査・森林散策」
—専門家チームと一緒に上ノ原の植物を調査—
報告 草野 洋

8月17日、18日14名が参加して上ノ原の植物調査を行いました。

森林塾青水が上ノ原茅場の再生活動に着手して2024年が20年目の節目の時、記念事業として着手時に調査した生き物、特に植物相がどのように変化しているかを調べるために本格的な植物調査を本年の事業計画に盛り込んで実施しています。

調査は、幹事の西村さんを塾の担当者として茨城県霞ヶ浦環境科学センターの小幡さんの協力を仰いで実施しています。これまで春の調査を行い、今回は夏の調査になります。今回は小幡さんの仲間の飯田さんと栗原さんに同行していただきました。

この専門家チームに募集に応じた会員や一般参加者が加わり一緒に調査して記念事業を盛り上げようという目論見です。

一日目、午前11時半頃上ノ原に到着、先行して朝から調査を行っていた専門家チームの帰りを待って広場で待機、朝食後、調査を続ける専門家チームとは別行動で「ゆるぶの森」に入り、樹木の直径成長測定器（デンドロメーター）の設置、ブナの稚樹の発生調査、センサーカメラのデータ回収を行いました。



ブナの巨木にデンドロメーターを設置

デンドロメーターの設置とブナの発生調査

デンドロメーターとは、樹木の幹周りに取り付けて、直径などを測定する装置です。今回、取り付けたのはブナですが、直径は57.07cmでした。幹に固定されるため、定期的に計測することで、幹の成長量や成長速度を調べることができます。

また、このブナの周囲10メートル四方に発生、生育しているブナを37本を確認できました。これからのように推移するのか、興味が沸き立ちます。

この日、私にとっては衝撃的なことを目にしてしまいました。

上毛高原から旧水上町に入ると、湯桧曾付近利根川両岸で沢山の樹木が赤茶けて枯れているように見えます。特に、垣間見えた谷川方面がひどく、まる

で紅葉しているような様子は、この時期としては異様な風景です。藤原ダムを過ぎてもその風景が続き、ついには藤原の入り口集落のダム湖の上も程度こそ少ないものの集団的に赤茶けています。この時期、ミズナラなどの多いみなかみで葉の変色（枯損）する状態は「ナラ枯れ病」を疑わざるを得ません。

ナラ枯れ病は、ミズナラなどブナ科の樹木が枯れる森林病害虫で九州から東北までほとんどの地域で被害が急速に広がっていて、カシノナガキクイムシが媒介する病気です。



このナラ枯れがまさか標高の高い上ノ原までは侵入していないだろうとの思惑が外れ、広場から見る「柞の泉」の上部に赤茶けた樹木が2カ所見えたときには大きなため息が出ました。

ナラ枯れ被害と思われる樹木の枯れ 上はゆるぶの森奥、下は茅場の隣接地



上段左から右へ
・被害木（奥地）
・被害木（茅場隣接地）
・フラス
下段左から右へ
・穿孔跡
・被害木

■流域連携プログラム

「土呂部の草原で茅ポッチづくり」

報告 草野 洋

そしてもう1カ所の現場探しは難航しました。この箇所は「ゆるぶの森（塾の管理地）」から外れていてかなり遠く、森に入ると被害木は見えなくなります。広場から見た柞の泉のからの方向と距離を頼りに急傾斜でガレ場、時には獣道をたどりながら登ること40分、ようやく到達、被害木はいずれもミズナラで3本ありました。これもフラスや枯れの状態からナラ枯れ病だと推定しました。フラスのサンプルを採取して下山しましたが、どうしてここまでカシノナガキイムシが飛来したのか。多分上昇気流に乗り到達したのではないかと思います。

ナラ枯れの脅威をひしひしと感じましたがこの付近には中径級のブナが集团的に生育していたのを確認できたのは収穫でした。

この日の気温はかなり高く少し歩くだけで汗びっしょり。専門家チームが一段落したあと十郎太沢で冷やしたスイカやキュウリで身体を冷やしました。

今回の宿はホテルサンバードの温泉付きコテージ、夕食はバーベキューを楽しくいただきました。

2日目は、専門家チームが残りの調査を終えたあと、小幡さんのガイドで上ノ原の今の季節の植物を



解説してもらいました(写真・左)。様々な植物がある上ノ原、その違いと見分け方を丁寧に教えてもらい、上ノ原の植物相



左 オオナンバンキセル

右 コオニユリ



の豊富さに今更ながら感心するとともに報告書が楽しみになりました。

そうこうするうちに藤原湖マラソンを無事に完走した稲さん夫妻が帰ってきました。さて、本日の昼食は念願の十郎太沢の流水を使った「流しそうめん」。北山塾長が用意した孟宗竹を使い、コテージで茹でたそうめんを、樋に流しながら麺ツユでいただきました。冷たくて大変美味しい流しそうめんでおなかがいっぱいになりました。来年もやりましょう。



青水の活動もコロナ前の状態にほぼ戻ったといっ
ていいでしょう。野焼きも思う存分に出来て、月一
回の活動も順調、その証の一つとして平成28年を最
初に5回を数えた日光市土呂部の「日光茅ポッチの
会」のフィールド訪問が久しぶりに実現しました。

今回の訪問は、9月21、22日。雨模様でしたが、
飯村孝文代表をはじめメンバーの皆さんの温かいお
もてなしもあって2日間を乗り切りました。

初日は、青水のメンバー15名が東武日光駅に11
時に集合、レンタカーと自家用車に分乗して、途中
は深い霧の中となりましたが、霧降高原を越えて土
呂部へと向かいました。

昼頃到着すると、民宿「水芭蕉」でお弁当をいた
だき、早速、レインコートを着けてカップ(草原)
の大曾根採草地に向かいました。途中、ビールの苦
み、香りの原料となるホップ(セイヨウカラハナソ
ウ)の仲間のカラハナソウが、以前と同じように出
迎えてくれました。



丸い形がいい感じの
カラハナソウの果穂



カップにつくと、飯村さんから土呂部草原の成り
立ちや保全の方法、ポッチの作り方などの説明を受
け、ポッチづくりに取りかかりました。(写真・下)



上ノ原のボッチは、屋根茅になるススキだけで作りますが、ここのボッチは牛の飼料用なので、木本類を取り除けば、ワラビなどの雑草が混ざってもよいので作りやすく、青水のメンバーは手慣れた様子



で作っていききました。小雨もあって蒸し暑く、事前に機械刈りしてあったエリアで、ボッチを作り終える頃には、みんな汗びしょりとなっていました。

その後、飯村さんの案内でこのカッパの周

カッパ広場と茅ボッチ

囲を散策して、草原にある植物を解説していただきました。この日に解説いただいた植物は沢山あったのですが記録したものではありません。アキノウナギツカミ、ヤナギタンポポ、アキノキリンソウ、ウメバチソウ、アキノタムラソウ、コウリンカなど（説明いただいた植物はこれの2、3倍はあったでしょう）。



ウメバチソウ



上 土呂部集落が望める展望台デッキ

下 土呂部集落 現在の住民は19名



今回のお宿は、民宿「水芭蕉」に先客があったため、1kmほど離れたキャンプ場「ドロブツクル」のコテージ3棟に分宿しました。まずは下流の日帰り温泉施設で汗を流したあと、キャンプ場のバーベキュー施設で夕食兼交流会。水芭蕉のお弁当やイワナの塩焼き(写真・右)などがとても美味しく、夜遅くまで話がつきませんでした。



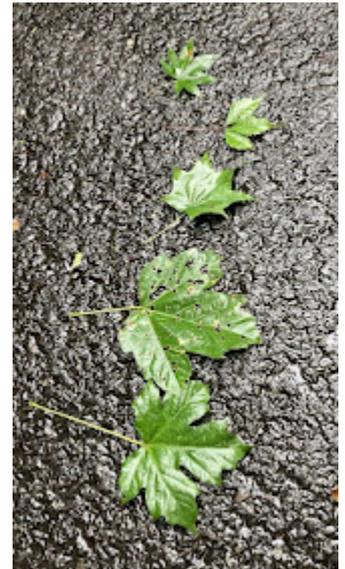
2日目はあいにくの朝から雨、ボッチづくりは諦めて、オホツパ採草地に向かいました。



オホツパ採草地に向かう前に位置などを説明



途中、クロビイタヤの自生地でその特徴などを聞き、4種のカエデ類、サリフタギ、ルリミノウシコロシなどを見ながら目的地に着きました、ここでは植物の維持増殖のための科学的方法を得るために、草地で実



カエデ5種類 手前からクロビイタヤ、カジカエデ、イタヤカエデ、ミツバカエデ、オオモミジ

施している管理試験の様子を説明いただきました。ここを引き上げるころには本格的な降雨になり道路を雨が川のように流れていました。

日光茅ボッチの皆さんのお見送りを受けて土呂部を出て途中のそばや「大滝」で昼食を終える頃には雨も上がりました。

このように天候には恵まれませんでしたが飯村さんはじめ日光茅ボッチの皆様のおもてなしがいっぱいの楽しく結い意義な訪問となりました。日光茅ボッチの会の皆様本当にありがとうございました。



雨の中地のオホツパ採草地

■流域連携プログラム 「草原と森の再生プログラム」 —ミズナラ林整備とススキの種採取— 報告 稲 貴夫

9月28日、29日の二日間、茅穂(ススキの種)の採取を主目的としたプログラムを会員・会友11人が参加して実施しました。

茅穂採取は今年で三回目ですが、今回の特徴は、

茅穂採取の作業を効率的に行うために、ハサミで切り取った茅穂を手間なく取り込むために、口が開いたまま腰にぶら下げる専用の採取用袋を準備したことです。参加者はそれぞれ、その専用袋を腰に取り付け、適当な茅の穂を求めて茅場に踏み入り、採取していきましました。

ススキの穂を採る 何のために？

気候変動 多発する災害

急激に地球は変化している

入会の森 みなかみ藤原上ノ原茅場の活動に関わって 10 年。3 年前からススキの穂を収穫しています。山地崩壊した箇所に、ススキの郷土種とパイオニア樹木の種を空中散布して、緑化する工法があるのです。

関東周辺の崩壊地に蒔く、関東周辺のススキの郷土種を探しに、上ノ原のススキを調査してくれた方のお話です。

「近年中国産など輸入したススキの種を蒔いていた。それでは、外来種の森へ遷移は、辿っていった。在来種を蒔くと、その郷土が本来持っている自然のちから、そこに根付いていた植物の遷移を辿ることが分かった。」

地球本来のちから 郷土のちから

最大限に引き出すために

いつどこでなにが起こるかわからない時代

非力な私でもできること

ススキの穂を採る 崩壊した大地に届け

災害に強い大地への一歩となるために

種が熟し、飛び立つ寸前の今頃に穂を採る。伝承されてきた里山のしごとにはなかった、新しい入会仕事 ススキの穂採り

それは、人びとが利便を求め、産業化を突き進み、自然から離れて暮らすようになった証。

入会仕事が途切れていなかったら、必要な仕事なんだろうなあ

そう感じながら

空を仰ぎ

穂を手繰り寄せ

パチン パチン

ハサミを動かすのです

藤岡和子(副塾長)



それぞれの茅穂採りスタイル

上は、事前の準備

右は、今年から導入した茅穂入れ(山菜採取袋)



また、北山塾長と清水顧問、稲、藤岡幹事の四名は、「里山の土壌を知るプロジェクト 2024」のための土壌のサンプル採取を合わせて実施しました。

これは、京都大学フィールド研究所が実施している調査で、近年に伐採された里山と、長年伐採されていない里山の双方で、①土壌の現状評価、②伐採の影響評価をおこなうというものです。公募により条件に合う山林を所有、または管理する団体などが参加して実施する「市民参加型の全国里山土壌調査」ですが、イオン環境財団からこの情報を得た青水では、まさに十年前に伐採した「増井試験地」が調査適地と判断して応募しました。そのサンプル採取を今回のプログラムに併せて実施したものです。

サンプル採取は、調査マニュアルに従い、伐採地とその対象区とした隣接したミズナラ林の2カ所で実施。土壌や落葉の採取、提供の他に様々な調査項目があ



上 土壌のサンプル採取

下 周囲の樹木の幹回りを測定

■諏訪神社大祭—六年ぶりに獅子舞奉納— 報告 草野 洋

り、植物に対する知識とともに練度も必要な作業でしたが、北山塾長の差配で無事に終了、茅穂採取に合流しました。

二日目も朝から茅穂を採取。生憎小雨が降り始めて茅穂も濡れてきたので、作業は早めに切り上げ、上ノ原のナラ枯れの状況を視察しました。ナラ枯れにやられたのは、柞の泉の手前にあるミズナラです。葉は茶色に枯れ、ミズナラの幹の周りの下草は、木食い虫にやられた木の粉が降り落ちていました。草野さんからナラ枯れの説明を受けながら、今後の対策などを話し合いました。



ナラ枯れ病で枯れたミズナラ 右は樹下のフラス

その後は、濡れないようにシートに包んだ茅穂を古民家に運び、昨日の分と一緒に拵げて、事後を塾長に託しました。(※青水の二日間の成果は、乾燥重量で12.6キログラムでした。自伐林業グループの分も入れて、今年約30キログラムを納入できるようです。青水の分については、実働人数や天候による時間の制約を考えると、採取用袋の効果も大きかったと思います。)



その後は、諏訪神社に移動し、お参りのあと歌舞伎舞台の軒下を借りて弁当を拵げ、草木が生えてきた屋根の葺き替えなどを話題にしながら、二日間のプログラムを終えました。



地元住民の北山塾長から「今年の諏訪神社のお祭りには獅子舞が奉納されます」との知らせをいただいたのが7月の幹事会。コロナ禍や担い手不足による休止を経て、6年ぶりの獅子舞奉納の復活である。諏訪神社の獅子舞は、藤原集落の上区、中区、下区が当番で行うしきたりであり、上・下区は担い手不足で休止となったが、今年は若者人口が多い中区の当番で6年ぶりの奉納が実現した。中区の皆さんの熱意に頭が下がる思いである。

諏訪神社のお祭りには藤原中の人々が集まる。ふるさとを離れた人も久しぶりに帰郷する。青水の活動でほぼ1月に1回の頻度で藤原を訪れても、離れた方はもちろん在郷の方も普段忙しくてなかなか会えない。懐かしい人やお世話になった方にお祭りの日ならば会える。復活と聞いて、何が何でも駆けつけようとして清水初代塾長と川端顧問に声をかけたら待ってましたとばかりに賛同を得た。そして塾の若きエース藤岡和子副塾長も参加して塾から4人が前日の9月7日に藤原を訪れた。

この日は「パル」に宿泊、久保さんがバーベキューで歓迎してくれて思い出話や塾の課題を話し合う宵が更けていった。

9月8日、お祭り当日、まずは上ノ原に行き、ススキの生育具合などを見てから諏訪神社へ。

少しばかりの御寄進を奉納。やはり、思ったとおりお世話になった方や懐かしい方の顔がある。皆さんの顔が明るい、久しぶりの賑わいにうれしくなる。

この獅子舞がはじまったのは古く、建久2年(1191年)に源頼朝の家臣によって伝えられたという記録が残っている。この獅子舞が奉納される舞台では、もともと地方歌舞伎が演じられていたが、舞台の茅葺きに青水が上ノ原の茅を寄進している。その屋根にも木や草が生えて少し朽ちている。そろそろ葺き替え時かもしれない。



ススキの花と野ブドウ



幟旗がはためく境内

お祭りは神事のあと 10 時から司会の口上に始まり、獅子舞の幕の合間に幼稚園児のダンス、日本舞踊、歌謡曲などの芸達者な村人たちの余興が入り賑やか。獅子舞は「国久保」「耶魔懸り」「吉利」の三幕。一幕が 30 分から 50 分で、暑い中での汗だくの熱演である。栈敷席から「いいぞー」の声、拍手。そして沢山のおひねりが飛ぶ。伝統芸能、芸達者のオアフォーマンス、懐かしい人々、そしてにぎわい、やはり、祭りはこうでなくては・・・。



花笠と太鼓・鐘



獅子舞「耶魔懸り」
右端が北山塾長



上 パフォーマンスの数々
左 栈敷席 屋根の植物たちも観客
下 お世話になった方に久しぶりの対面



■「第 14 回草原シンポジウム・サミット」

報告 河辺 穂奈美

10 月 4, 5 日、長野県小谷村の白馬アルプスホテルで開催された「第 14 回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」に塾から 5 名が参加しました。

河辺は前日の 3 日昼頃に小谷入りし、現在は阿蘇で活躍する増井さんら 3 名と合流して柵池高原スキー場のゲレンデとなる草原を見に行きました。もちろんここも火入れにより維持されてきたそうで、雪国の山間地域に特有のかりヤスが残る草原が広がっていました。(写真・下)



茅の中にふと上ノ原では見たことのないマメ科の葉を見かけ、尋ねてみると「クララ」とのこと。絶滅が危惧される草原性のチョウ「オオルリシジミ」が、唯一食草として利用する植物です。

県内でもほとんどの地域で絶滅したそうで、このスキー場にオオルリシジミが生息しているかは不明ですが、保たれてきた草原の価値、残していく意味のひとつを早くも見た気がしました。

その後「道の駅おたり」へ、(株)小谷屋根の 3 代目・松澤朋典さんの茅作品を見学に行きました。売店に入るとすぐに、レジカウンターの後に掲げられた大きな立体地図に目を奪われました(写真・下)。

地元の小学生が刈り集めた茅を使い作られた“茅葺きアート”は、北アルプスから日本海にわたる小谷村周辺の地形を表しています。この美しさ、かつこよさは写真では絶対に伝わらないので、ぜひ小谷を訪れて実物をご覧になることをオススメします！



4 日午前には「未来に残したい草原の里 100 選」の認定書授与式がありました。我々のフィールド上ノ原茅場も第 1 期の 2022 年に認定を賜りました。第 3 期の今年はお谷をはじめ新たに 5 か所が選ばれ、草原の里の総数は全国 53 か所になったそうです。各選定地による紹介スピーチからは、それぞれに生き立ちや植生、活動の個性があること、維持管理の工夫が伺えました。

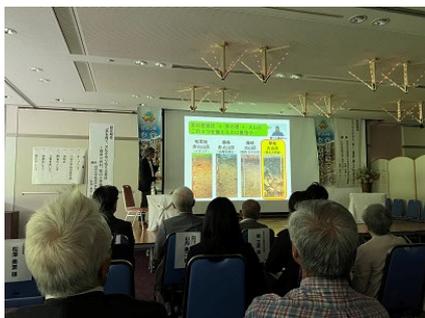
午後からは「つなげよう 茅場が育んだ技術と命」というスローガンのもと、シンポジウムが行われました。基調講演で日本茅葺き文化協会代表理事の安

藤邦廣さんと対談された松澤敬夫さんは、火入れや茅刈りなど茅の生産＝茅場の維持から屋根を葺くまで、小谷村で約60年にわたり茅の全てに携わってこられた名匠です。そのお話はそのまま地域の伝説や民話を聞いているようでした。特に印象的だったのは、小谷の茅葺きサイクルのお話。かつてこの地域には100軒の茅葺き住居があり、毎年約25,000把の茅を刈り、それを使って2軒の葺き替えと何軒かの差し茅（修繕）を行いながら、50年ですべての屋根が葺き替わっていたそう。この大きなサイクルが地域の人々の手で営まれ続けていたことは、（30代前半の私には）途方もないことのように感じました。

(写真・左)



続いての研究報告、分科会、全体会では、茅場や茅葺き文化・技術の保全と継承について議論されました**(写真・左)**。4つの分科会ではそれぞれの視点から様々な意見が熱く交わされたようでしたが、「多様な人々が多様な目的で多様な活動をする」「茅場の総合力を生かす」を共通のキーワードとして全体会が締めくくられました。



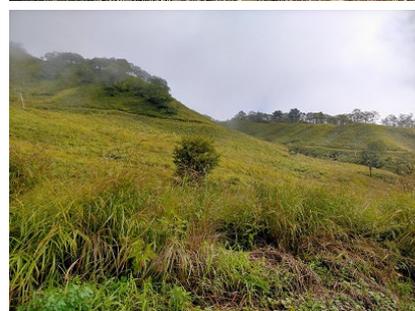
5日の現地見学会は6台のバスに分乗し、文化庁ふるさと文化財の森に指定された2つの茅場と、長野県宝千國家住宅（牛方宿）を巡りました。快晴とはなりませんでしたが前日までの雨も上がり、参加者はやはりお外が好きな人が多いのか皆興味津々で、

茅刈り体験や茅葺き体験など時間をオーバーして楽しみました。**(写真・左)**



ススキよりも細く中空であるカリヤスは名前の通り刈りやすく、サクサクした刈り応えです。上ノ原と同じくロープを使わない友結びで束にしますが、結ぶ位置は茅の背丈の半分より上と高め。茅の根本側が広が

るので通気性が良いそうです。また、ボッチのてっぺんの穂が集まった部分をくると丸めてお団子状にしておくことで雨の浸入を防ぐとのこと。上ノ原にはない、茅を乾かす工夫も見られました。さらにもう一点、1つのボッチは6つの束で作るとの違いもありました。集計しにくいのですが、ダースで数える慣わしなのか、1軒の屋根を葺くのに必要な束数が6の倍数なのか…。単純にカリヤスはススキよりしなやかなので、倒れないようにという物理的な理由かもしれません。**(写真・上)**



東農大教授の武生さんからは、火入れが茅場の植生だけでなく土壌にも大きく影響するとの説明もありました。年に一度の火入れにより積もる灰はわずかとのことですが、約30年前に火入れを辞めた元茅場の土壌は明らかに黒色から茶色に変化していて、火入れを続けていくことの重要性が伺えました。**(写真・下)**

今回の全国草原サミット・シンポジウムには約180名の草原に関わる方々が参加されました。それぞれに草原に対する興味や関心のポイント、関わり方は様々ですが、草原への情熱は共通していて、とても有意義な時間となりました。このつながりや学んだ知識、技術を上ノ原の活動に活かしながら、森林塾青水ならではの関わり方を続け、広げていきたいです。



第一分科会 草原の生物多様性 一維持される仕組みに着目して一

報告 西村大志

コーディネーター

井田 秀行 氏 (信州大学教育学部教授)

発表者

高橋 栞 氏 (東京大学農学生命科学研究科)

○最初に高橋氏から「茅場の現状と新しい維持管理のカタチ」の発表

・茅場利用の実態について全国 1718 自治体にアンケートし、965 回答。現在及び過去の茅場の面積や管理者、茅葺きの建物の有無と茅の調達先などを把握

・茅の質の低下が言われる妙技の鼻で、過去の茅サンプル(屋根の古茅)や植生を分析

→屋根材の茅として有用な植物種が減少し、増える困る種が増加していた。

→利水のための水位上昇による湿生植物群落の消失がその要因の一つと考察

・茅場関係など、千葉・茨城の活動に参加するゆるいコミュニティ「若手の会」の宣伝

→参加しやすいポイント：①知り合いがいる、②移動手段がある、③実際に体を動かせる

○質疑応答・意見交換

・西日本のほうが草原が多い理由→施肥メインだったから？利用形態がちがったから？

・シマガヤが細く短くなったというのは古茅から検証できるか？→そこまでは難しそう

・活動コミュニティのポイント→①はじめる、②ひろがる、③つづいていく(楽しさ)

・茅場維持の担い手確保等に活用できる可能性がある仕組み→OECM、TNFD(企業が生物多様性への影響について情報公開し、投資の判断基準となるしくみ)、CSR、SDGs など

・九重の自然を守る会は、九州電力に声をかけて野焼きなどに参加してもらっており、人気があり 200 人くらい参加している

○感想・考えたこと

・企業の力を上ノ原の活動にも活かさないか→CSR や TNFD など仕組みの把握、どのようにフィールドと企業のつながりを作っているのか。

・体験コンテンツとして、茅刈りやワラビ採りなどもコト消費として魅力的→観光的な側面からアピールできないか。

・楽しくなければ続かない→活動の運営も一緒

第二分科会 「茅刈りと萱葺きを未来につなぐ」 報告 稲 貴夫

青水より藤岡副塾長と稲の二名が参加しました。最初に、基調講演をつとめられた松澤敬夫さんの息子さんと、(株)小谷屋根の「茅葺き師」松澤朋典さんが、地元小谷村にある茅場の現況について解説。「シヨクの茅場」「池の田茅場」「牧の入茅場」「堂

の入茅場」の四か所ある中で、毎年、牧の入を手始めに、足りない場合は他にも刈ってゆくという手順で、一把径 20cm(七寸)、これを六把で一纏めにして立てます。



かつて小谷村には、約 100 軒の茅葺きの建物がありましたが、現在は、民家 3、資料館 2、その他 5 の計 10 軒が維持されています。また、小谷では「二三ぶっくり、四五六びしゃ」と言われる、雪国に適合した屋根の勾配で葺かれることも伺いました。

その後、茅葺き文化協会の上野弥智代さんがコーディネーターをつとめ、参加者も交えて討議が進められました。

上ノ原で課題の「茅刈り衆」の確保については、小谷では「刈り子」と称し、子育てママや山岳ガイド、スキー産業従事者、スキーヤー、トレイルランナーなどに声をかけているとのことでした。また、茅の曳き出しは、運動競技の練習も兼ねて参加する人もいるなど、様々な方法で従事者を確保しています。青水のように、茅刈りイベントに都会からの参加を呼びかけるという方式はとらず、地元及び近隣の関係者が協力しあっているようですが、それだけ茅場の存在が地元でも認知されていると感じました。

その他、様々な質疑や意見が交わされましたが、最後に上野さんがおよそ次のようにまとめ、第二分科会は終了しました。

○茅刈りそのものの楽しさ、自分で刈った茅が役立つことへの感動、中で火が使える、雨音もしない茅葺き住宅、そして、雪囲いや堆肥などの段階的利用など、茅には様々なメリットがある。

○それらが必ずしも共有されていない現状を踏まえ、「使って、育てる」を合言葉に情報プラットフォームを構築するなど、総合的な力が生かせるような取り組みを進めてゆく。

第三分科会 「草原の管理技術を学び伝える」 報告 北山 郁人

コーディネーター

東京農業大学地域環境科学部教授 武生 雅明 氏
発表者

親沢北観光委員会 栗田 優 氏 雨中林野組合
荻澤 隆 氏

はじめに、コーディネーターの武生先生(数年前に上ノ原にも来ていただいたことがあります)よりカリヤスの特長などについて解説がありました。その中で、カリヤスはもともと蛇紋岩の崩壊地などの栄養もなく重金属が多いきわめて過酷な環境に生育する植物であるとお話がありました。上ノ原周辺の

「こもんずの広場」第4回

「こもんずの広場」第4回目の今号では、いよいよ「日替わり商店」が初登場。しかも河辺会員、川端顧問のお二人から寄稿をいただきました。お楽しみ下さい!!(笹岡)

■河辺穂奈美「草木供養塔への誘い」

9月の活動の際、『草木供養塔』が話題に上りました。上ノ原にも沢沿いにそれがあると、以前に清水さんから教わったことがあります。

なんとなく、薪や茅を日常的に使っていた時代に全国各地で自然発生的に置かれたんだろうと思っていました。今回、その起源ともいえるものが山形県にあると聞き、気になったので調べてみることにしました。

インターネットで検索すると、すぐに『草木塔ミュージアム』というページにたどり着きます。

なるほど、米沢市の団体が運営されています。これによると、建立創成期(1780年ころ)の草木塔が置賜地域に多くあり、ここから山形県内や全国へ広がった文化と考えられるそうです。また、「創成期の建立理由ははっきりとわかっていないものの、「草木国土悉皆成仏」という経文の全国的な使用傾向から墓石である可能性が判明」とのことに驚きました。

置賜民俗学会 梅津幸保さんの調査報告には、「群馬県片品村に片品草木塔が10基ある」と書かれています。近年に建てられたものだそう。機会があれば訪ねてみたいですね。

※※※※※※

ちなみに…セイヨウミツバチの養蜂では、取り外し可能な巣箱と巣枠を用いるため、作業の際に徒に蜂を殺めたり巣を壊したりすることはありません。それでも必ず犠牲は出てしまいますし、何より美味しいハチミツが得られるのはミツバチのおかげです。そんな労わりの気持ちを込めて、『蜜蜂慰霊碑』や『蜂塚』なるものが各地にあり、ミツバチの日の3月8日(語呂合わせ)には地域の養蜂家が集い、慰霊祭をする文化があるんですよ～!

※※※※※※

今年は茅出し・山の口終いの際、草木供養塔にも合わせてご挨拶しようと思いました。

引用

草木塔ミュージアム：<https://somokuto-m.jp/>

谷川岳、朝日岳や至仏山などの蛇紋岩の山にはカリヤスの仲間があるはずですよ。

カリヤスの茅場は、毎年火入れをおこないハギやススキなどを徹底的に排除しカリヤスだけの茅場を維持しているそうです。放置しておくとしスキが優先してしまうとのことでした。茅場の管理は、基本的に組合員の地域住民が協力して行いこれまで続けてきたが、茅葺屋根の住宅もなくなり継続していくことが困難になってきたとのことでした。

会場からは、カリヤスの茅は市場には出回っていないので、販売すればススキよりも価値があり高値で取引されるのではないかとのことでした。

下記サイトで、基調講演や研究報告、各分科会や現地見学会の動画等公開中。ご覧ください。

<https://www.sougen-summit.com/2024otari>

🔗「第14回全国草原サミット・シンポジウム in おたり」

■藤原だより 「藤原焼きの商品開発」

塾長 北山 郁人

群馬県北部には、おやき、みそやきもち、じりやきなどと呼ばれる小麦粉にフキみそやネギなどその時採れる山菜などを入れて焼いた郷土食があります。おやきというと信州のおやきをイメージしてしまいがちですが、群馬のおやきは、ふっくらしたものもありますが、どちらかというとチジミのようなものが多く、多めの油で揚げるように焼いて熱々のものを食べると最高です。

これを風の谷プロジェクトの藤原チームで商品開発できないかと今年度から取り組んでいます。いろいろな具材を試したり、ソースを変えてみたり試行錯誤しております。

先日、藤原小学校で開催されたふるさと藤原祭で藤原ぼんの展示と藤原焼の試食会を行いました。今回は、オーソドックスなフキみそでタコ焼き機で丸く焼いてみました。一口サイズで食べやすく好評でした。いずれ皆さんにもお披露目できる日が近いと思います。



■川端英雄「万葉の故地 高岡」(前編)

○ 万葉集とかすかなつながりの上の原

森林塾青水のメンバーなら、誰しものがピンとくる白い小さな花を咲かせるムラサキ。わずかにこのムラサキが上ノ原と万葉集をつなぎ合わせている。ご縁ですね。

あかねさす むらさきの 紫 野行き しめの 標野行き

野守は見ずや 君が袖振る

(額田王 万葉集巻1・20番)

○訪れたきっかけ

万葉仲間8人で行く予定が、お正月の能登地震で7人が不参加、オンリーワンの2泊3日と相成りました。3日間とも自由行動。フリーもまた、良し。

○万葉の故地～高岡(富山県)と大伴家持

後に万葉集編纂者となる大伴家持(養老2年・718年生)は29歳、今の兵庫県くらいに相当する上国「越中国」に国守(今の知事相当)として意気揚々として赴任。何といっても名門大伴家の当主でしたから。出世街道を歩んできた某県知事も、同じような心意気で着任したんだろうなあ、相似形だ、と思う。賢くて、男前で、自信満々だもんね。

家持が万葉集中ここ越中国で詠んだ歌だけで223首もあり、限られた場所での歌数の多さが万葉故地といわれる所以なのでしょう。今も高岡では、10月に万葉集を連続三昼夜にわたって、2000人で朗詠するそうです(高岡万葉祭り)

実は自分も2001年からおよそ24年かけて万葉講座に通っていますが、全4500余首(20巻)のうちはまだ3500余首しか読んでいない。残り人生で1000首を読み通せるのでしょうか? 読了する。未完で終わる。みなさんはどちらにかけますか?



【雨晴海岸・しづたに 渋谿の海】初日

駅から5分ほどの白砂青松。家持の頃には^{しづたに}渋谿の崎と呼ばれ、海岸から眺める立山(当時の読み方)連峰はまさに絶景のハズ。今日は朝から曇っているので、素顔拝見は諦めて駅前広場の大きな看板の立山連峰の写真を撮ることで我慢、がまん(写真・左下)。都落ちの義経もここで急な雨を岩陰(義経岩)で避けたとか。

戻ってきたら、雨晴海岸駅にインバウンドがいたぞ。騒がしくはないから韓国人かも。もしかしたら万葉歌の勉強? そういや、万葉集は古代韓国語で書かれていたとのベストセラーがあったな。

【ふたがみさん 二上山】2日目

にじょうさん 奈良大和の二上山と同一名。万葉で繋がれているか。誰もいないJR伏木駅前の液状化陥没を横目に、高岡駅から呼んだタクシー10分余で頂上に。桜、紅葉の名所といえ今は7月。緑が目沁みる。地震と暑さでここ伏木駅のタクシーは高岡に集中したんだと、運転手。

頂上から高岡市街を挟んで、見えたなら感激に違いない立山連峰は雲の中。空の無い東京から、わざわざ来た高岡にも空がない。涙もないが、悔しいね!

山から下る途中、越中国一宮・^{けた}気多神社・大伴神社を参拝。石段、杉並木、こけら葺きの調和に、品格を感じる。神社の境内には横書き、アルファベットが見当たらないのが、大和民族の一員には一番落ち着くね。観光パンフに載っていないからかあるいは山の上だからか、奈良時代の創建というのに家持の歌碑が見当たらない。大伴神社は脇でひっそりと。

(つづく)

編集後記

「茅風通信」73号がようやく出来上がりました。今年度は活動頻度がコロナ前に戻り、日光茅ボッチの会との交流再開や学習会の実施、草原シンポジウムへの参画などもあって、青水にとって「当たり年」となりました。そして12月2日には、(公財)社会貢献支援財団より社会貢献表彰を受賞致しました。これも青水を支えて頂いている皆様のお蔭であり、心から感謝申し上げます。これからも飲水思源の心を忘れず、来年の20周年記念事業を契機に、一層活動を盛り上げてゆきたいと思っております。そんなこともあり73号は、14頁の盛り沢山で予定より大分遅れ、また茅刈りや茅出しの報告は次号となりました。ご了承の上、次号も乞うご期待。(貴)